

か かん けん 河環研だより



ナマズ

- 1 研究紹介「養殖ナマズの安定供給システムの開発」
- 2 「全国湖沼河川養殖研究会 第82回大会」
(岐阜県開催)
- 3 合同プログラム「ヨシノボリの不思議を研究しよう」を開催
- 4 アカザの白化個体(アルビノ)が見つかる

1 研究紹介「養殖ナマズの安定供給システムの開発」

当研究所では、平成21年度より「養殖ナマズの安定供給システムの開発」という研究を開始しました。この研究では、食用ナマズの生産から消費までを岐阜県内でまかなう地産地消の推進と地域特産品としてナマズ料理を普及させるという地域振興をねらいとしています。また、養殖業者などを支援するために、コイ養殖場や稲作水田などの生産現場をナマズ養殖に利用し低迷する内水面水産業を活性化させることも目的のひとつです。

この研究課題では、実験や調査と併行して、ナマズの試験生産を実施しています。今年度は、少ない初期投資で効率よくナマズを養殖できる場所として、関市・加茂郡白川町の水田ならびに養殖場を選びました。このナマズの試験生産は、稲作農家や養鯉業者などのご協力のもとで行っています。



水田へのナマズ稚魚の放流



放流前の稚魚

初夏、ふ化したナマズの稚魚を水田に放流しました。水田での養殖の利点は、広い空間での養殖によりナマズ同士の共食いが軽減されることや、ナマズが水田に生息している生物(ミジンコ、ヤゴ、オタマジャクシなど)を餌として利用するため、給餌などに必要な経費や労力がかからないことです。関市と白川町で合計約64,000尾(全長1cm程度)のナマズ稚魚を放流し、約1ヶ月後に、合計約4,000尾(10cmほどに成長)のナマズを回収しました。



水田からの回収の様子

水田から回収した4,000尾のナマズ稚魚は、現在、関市と白川町の養殖池で飼育しています。ナマズは大量に生産・消費されるような魚ではありませんが、将来、岐阜県の水産業を象徴する、特色ある地域特産品として普及されることを目指しています。
(本所 生態環境部)



2 「全国湖沼河川養殖研究会 第82回大会」 (岐阜県開催)

9月3日、4日に全国湖沼河川養殖研究会第82回大会を、岐阜市内のホテルで開催しました。全国湖沼河川養殖研究会は、湖沼や河川での増養殖に関する調査研究を行う都道府県の機関で組織され、大正8年に第1回大会が開催された歴史のある研究会です。今回の大会では、全国各地から約110名の内水面水産業の専門家、漁業従事者が集まり「水産生物の生息環境保全と21世紀の内水面 - 森・川・海が育む水産資源の有効利用と漁場管理」をテーマとして、シンポジウムと研究発表を行いました。会議では、東京大



学大学院総合文化研究科の清野聡子先生の基調講演「森・川・海をつなぐ生態系の保全と水産業の振興を考える」を始め、海域でのアユ仔魚の調査から、翌年のアユの遡上量を予測する研究や、内湾の環境と河川流量の関係がアサリやノリなどの資源に与える影響に関する研究、80年ぶりに新種が記載されたウナギ研究に関する最新の話題など、多岐にわたる分野の最新の研究成果等が発表され、活発な議論が交わされました。 (本所 資源増殖部 中居 裕)



3 合同プログラム「ヨシノボリの不思議を研究しよう」を開催

夏休み期間中の小学生向け特別企画「河川環境楽園 夏休みツアー “川の楽校 2009”」のひとつとして、8月12日に木曾川水園自然発見館と合同で「ヨシノボリの不思議を研究しよう」を開催しました。川で魚捕りを体験した後、当研究所が開発した「傾斜可変実験水路」を使用してヨシノボリの定位能力を調べました。参加者には、野外活動や公開実験を楽しみながらヨシノボリについて学習してもらうことができました。 (本所 生態環境部 望月 聖子)



4 アカザの白化個体 (アルビノ) が見つかる



上：白化個体、下：通常の個体

下呂支所の近くの益田川(飛騨川)でアカザの白化個体(アルビノ)が見つかりました。これは、全長10cmほどの成魚で、地元の漁業者の方から提供されたものです。益田川では、去年発見されたアカザの白化個体に続いて、2例目の確認になります。体色が目立つ白化個体は、捕食者に発見されやすいので、自然界ではなかなか生き残らないといわれています。ただし、夜行性の底生魚であるアカザは、昼間は石の下などに隠れているので、鳥など昼行性の捕食者には見つかりにくいものと考えられます。夜行性の底生魚というアカザの特徴は、白化個体が成魚期まで生き延びることができた要因のひとつなのかもしれません。

(下呂支所 岸 大弼)